

# 一国主義的・近代主義的な ピューリタン革命解釈を乗り越える

日本におけるピューリタン革命研究を先導し続ける著者の、総決算ともいえる著作

仲丸英起

「ピューリタン革命」という語は、その名称にウァリエーションはあっても世界史の教科書には必ず記載されている。すなわち、日本においては世界の歴史におけるこの事件の重要性が、一般的に認められているといつてよいだろう。にもかかわらず、この語によって指し示される17世紀中葉の一連の出来事は、新興ブルジョアが国王・貴族を打倒して封建社会から資本主義社会へ移行したというマルクス主義的なイメージか、さもなければピューリタンの思想に現代における民主主義の源流を見出そうとするホイック主義的なイメージとして流布している感が強い。こうした視点は一見すると理解しやすいものであるが、地域ごとの発展段階論に立つ「世界史の基本法則」の有効性が失われて久しい今日においては、むしろその世界史上における意義を見えにくくさせてしまっている。こうした「一國主義的・近代主義的な解釈は、欧米では1960・70年代には既に批判に晒されるようになっていたが、長らく戦後歴史学の影響下にあった日本におけるその残滓の払拭は、依然として困難な課題のままに留まっている。

本書は、こうした状況を打破すべく精力的な研究活動を続け、日本におけるピューリタン革命研究を先導し続ける著者による、待望久しかった本格的な学術書である。序章と終章を除き、既発表論文に加筆修正を加えた論考から集められているが、総形式に並置されているわけではなく、以下の二つの軸を中心に再構成されている。第一の軸は近代主義を批判すべく打ち出された終末論・千年王国論の視座であり、これにもとづき近代の民主主義・資本主義に直結しない近世独自の宗教思想の解明が目指される。第二の軸はイングランド一國史観を批判すべく打ち出された国際関係の視座であり、国家という枠組みを越えて活動していたピューリタンたちの紐帯から革命の再検討が行われることになる。より具体的な課題としては、国際関係が革命に与えた影響、独立派の思想における千年王国論の意義、国王処刑後の独立派の変容という3点が、第I・II部として括られた各論考の中で探究されることになる。

まず第一部では、初期スチュアート朝において中央政府がとった外交政策が、地方社会におけるピューリタン・

ジェントリと呼ばれる人々の出現を促し、彼らと聖職者や新興貿易商人とが結びついた人的なピューリタン・ネットワークが、オランダやニュージーランドにまで拡大した状況が明らかにされる。第二部では、主要な独立派聖職者とその思想的基盤を千年王国論においており、それは国王派を打倒し国教会体制の基盤を掘り崩す「革命の思想」であったこと、ただしニューイングランドにおいては先住民の同化や支配に用いられる「帝国の思想」として機能したと指摘される。第三部においては、1649年以降の安定した秩序が求められる状況下で、「革命の思想」たる千年王国論はその有効性を失い、独立派聖職者の多くは現実的な対応を迫られて保守化し、急進的な思想を堅持しようとするれば権威と対峙せざるをえなくなっていく状況が示され、こうした思想的変容は宗教よりの国益を優先するロマウエルの外交政策にも通底していったことが明らかにされる。

著者の前著『千年王国を夢見た革命』は千年王国論の通時的検討が主題であったため、ピューリタン革命をそれ自体を正面から探究しようとしたものではなかった。同じく『ピューリタン革命と複合国家』は、入門書としての性格が強く、内容的にもピューリタン革命期におけるブリテン島内の三国・四地域の関係が中心となっていた。これに対して本書においては、ピューリタン革命を共時的に解明するための手段として千年王国論と国際関係が取り上げられ、おおよそ近代的な民主主義

や資本主義とは異なる千年王国論が革命の思想的推進力となり、またその影響はイングランド一國で完結するものではなく国際的な相互関係を抜きにしては語りえないことが、かなりの説得力を持って実証されている。その点で、一國主義的・近代主義的なピューリタン革命解釈を乗り越えようという著者の意図は、ある程度まで果たされているといえるだろう。前述したように革命に対する旧来のイメージが根強い日本において、その解毒剤としての本書の役割は大きい。

他方で、残された課題も多い。著者自身も近代における千年王国論の意義、ブリテン諸島における複合国家の形成過程、帝国という視点からみた革命の遺産の再検討を今後も追究すべき課題として挙げている。この他にも、ピューリタンの思想は革命期における具体的な政治状況とどのような関連を有し、また民衆に対してどのような影響をもたらしたのか、国教会側にも国際的な結びつきは存在したのではないか、ポスト修正主義の潮流において進展している詳細な政治史・地方史研究と本書の主張はどのように接合するのか、など論点は尽きない。いずれにしても、本書は日本では問題関心自体が集まりにくくなってしまったピューリタン革命についてひたむきに研究してきた著者の総決算ともいえる著作である。本書の分析を踏まえて、今一度この事件についてのさまざまな研究が活発化することを期待したい。



千年王国論と外交政策から捉え直す—伝説的思想原典と国際ネットワークはピューリタン革命と植民地へ何をもたらしたか—  
ミネルヴァ書房

(金沢学院大学文学部歴史文化学科講師)